

平成29年度中学校学力向上対策支援事業に係る 第1回深い学びを実現する教科別協議会（外国語科）〔記録〕

【目的】各中学校英語科代表の教員・中学校学力向上支援教員・指導教諭等を対象に、学習指導要領の主旨を踏まえた授業づくりや、次期学習指導要領を見据えた取組に関する講義を行うことにより、英語科教員の指導力向上に資する。

【主催】大分県教育委員会

【期日】平成29年11月7日（火）13:30～16:20

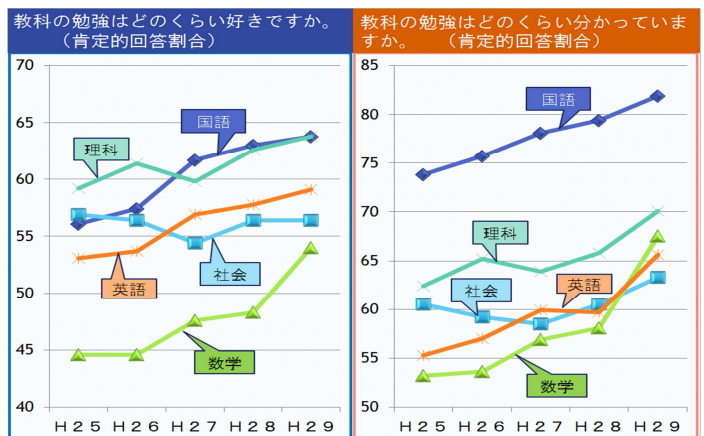
【場所】コンパルホール 3階多目的ホール

I 開会行事

大分県教育委員会挨拶 大分県教育庁義務教育課参事 武野 太

【要旨】

- 各種調査の結果から、中学校の先生方の指導の成果が現れ、感謝している。
- 質問紙結果から、教科の勉強が好きになれば、教科の勉強もわかるようになる傾向が見えてくる。
- 生徒にとって授業が楽しい、わかるということが大切である。
- 各種調査は、平均だけを見るのではなく、一人一人を見ていく必要がある。
- 新大分スタンダードは、型として捉えるのではなく、授業改善の視点として捉えて欲しい。
- 学びに向かう力の育成に向けて今後も一層取り組んで欲しい。



II 講義

「新学習指導要領を見据えた中学校英語科の授業づくりー学習指導要領改訂を踏まえてー」

文部科学省初等中等教育局視学官 平木 裕 氏

【要旨】

学習指導要領改訂の主旨

- 平成30年度～平成32年度の移行期間では、平成31年度の1年生と平成32年度の1年生と2年生について、平成33年度の完全実施後と段差が生じないように配慮する必要がある。
- 小学校では、平成30年度から3・4年生で外国語活動、5・6年生で外国語を学習した上で中学校に入学してくるが、今後入学する年度によって生徒の学びの状況が違うことから、中学校教員は小学校の学びを知っておく必要がある。
- 新学習指導要領解説は、読めばよくわかるようなつくりをしている。そのため例示を多く記載している。よく読みこんで授業づくりに生かして欲しい。
- 育成を目指す資質・能力の視点から授業改善のポイント（⇒の部分）は、
 - （1）生きて働く知識及び技能
⇒生徒による使い込み
 - （2）未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力等
⇒未知の状況に対応する言語活動
 - （3）学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性等
⇒実際の生活でもありうる場面設定
- 小学校、中学校、高等学校共通して大切なことは、児童生徒が興味のある題材を扱うことである。
- 日頃、日本語で行っているコミュニケーションのように、英語でも当たり前のようにコミュニケーションができるようにさせましょうということである。これが実現できれば、主体的・対話的で深い学びも実現できていると考える。
- コミュニケーションは、目的・場面・状況が大切である。これが無いと浅い学びになってしまう。

中学校外国語で目指すこと

- 小学校の外国語活動、外国語について中学校は学習内容及び学習状況を知っておかないと授業できないと考えて欲しい。
- 外国語のコミュニケーションとは、理解する、表現する、伝え合うことである。
- 知識技能については、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにすることが求められている。だからこそ、授業において外国語を使う場面をたくさん設定する必要



がある。

○思考力・判断力・表現力等については、理解したり、表現したり、伝え合ったりすることができる力を養うことが求められている。

○学びに向かう力、人間性等は主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことが求められている。

○領域別の目標で大切なこと

<聞くこと>

- ・必要な情報を把握すること
- ・話の概要を捉えること
- ・説明の要点を捉えること

<話すこと（やり取り）>

- ・即興で伝え合うこと
 - ⇒3年間かけて育成
 - ⇒原稿を事前準備×
 - ⇒練習などの準備時間×
 - ⇒不適切な間×
- ・話すことについて整理する場合は、イメージ的にはメモ程度

<話すこと（発表）>

- ・双方向ではなく、一方向をイメージしているため、やり取りではない。

<書くこと>

- ・書くということは、正確に書くこと
- ・まとまりのある文章を書くこと
- ・理由を簡単な語句や文を用いて書くこと

○指導計画の作成と内容の取り扱いについては、小学校や高等学校における指導との接続に留意する必要がある。

○言語活動は、まず「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなど」の活動を基本に考えなければならない。パターンプラクティスではいけない。

指導者に求められる英語力

○先生方には、オールイングリッシュの授業を求めているということではない。生徒自身が英語を使う授業をしていくことを求めているということである。だからこそ、生徒の英語による言語活動を中心に展開する授業を構想することが大切である。生徒同士や教師と生徒の英語のやり取りなどが当然のように行われなければならない。

○小中連携したカリキュラム作成率は12.6%である。今後は、カリキュラムの接続が課題である。

Ⅲ 協議及び行政説明

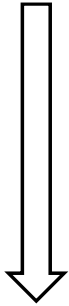
「大分県英語教育改善推進プランの目標実現に向けて」
大分県教育庁義務教育課課長補佐 小田 雅章



【行政説明】

○大分県英語教育改善推進プラン（平成28年3月）において発信力の育成を目指した授業改善をお願いしている。

<発信力を育成する学習過程>



- ・生徒が興味を持つ教材・題材
- ・魅力的な課題の提示、生徒による課題の発見
- ・学習の見通し、本時の目標（めあて）を生徒と共有
- ・技能統合型の活動、既習事項を活用する学習
- ・自分の考えを発表・交流する場
- ・「できた」「わかった」実感
- ・「できた」「わかったこと」の振り返り
- ・日常生活、社会生活の広がり

【協議】

以下3つの視点で、持ち寄ったレポートをもとにグループで協議を行った。

- ①ゴール（付きたい力）に向けて何をすべきか。
- ②自分の考えや気持ちを伝える言語活動をどのように設定するか。
- ③パフォーマンス評価をどのように行うか。



<記録>

阿南正樹（竹田教育事務所）

眞田貴弘（大分県教育センター）